善意のパリサイ人に

成瀬武史

明治学院の教壇に立つようになって数年間、「先生の日本語は変です」と学生によく指摘された。九州訛は馴染みのない者には店頭にさらせない規格外品らしい。ＮＨＫのラジオ番組では「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」を引用したところ、「柿が牡蛎に聞こえました」とアナウンサーに注意された。さら

に、ある編集者は私の原稿の「的を得た」を「的を射た」とさりげなく直してくれた。その後は「全うな」が「真っ当な」顔をして世に出ても咎められなかった。気がついてみると、私の思いがどんなみっともない衣装をまとって歩き回っているのか、指摘してくれる人は誰もいなくなっていた。

裸の王様が演じるピエロは侘びしい。そんな姿を世にさらしたくなければ、どうすればいいのか？ 自衛策はただ一つ、姿見の前に立つ習慣を身につけることであろう。手近な姿見はもちろん各種の辞書であるが、そのページをめくる必要を感じるかどうかが問題である。さらに手の届く範囲に辞書がないときはどうするか？「これでいいのかな」と自信に欠ける場合は、鏡になってくれそうな人に「念のため」聞いてみるしかない。しかしそれで疑問が解消するとは限らない。40年ほど前、ブリュッセルで裸の王様ならぬ裸の少年に会いに出かけた。「このあどけない子の本名は何というんだろう？」と自問しているところに、アメリカの女子大生たちがやってきた。「念のため」上の疑問を向けてみるとクスクス笑うばかり。仕方がないから「Pissing Boy で通じるの？」と畳みかけると「そんな品のない言葉は使わないわ」という。原語の Manikin Piss (<オランダ語 Manneken Pis) というオブラートに包んでおきたいらしい。「小便をする小さな男の子」という生々しい実態をあらわす言葉に変わりはないのに、血の気の薄いハイカラな外国語(もどき)に対する日本人の言語感覚に通じるなあと思った。

雉ならぬ身でも、声を出さずば生きてゆけないのが人間の社会。そこに無知がこぼれだし、恥が心の壁をかきむしる。ある原稿に若き日のＮＨＫラジオ歌謡「あざみの歌」を引用しようとして、危うく名に欺かれそうになったことがある。「念のため」に横井弘の歌詞にあたってみると、3節は「愛しの花よ汝はあざみ、心の花よ汝はあざみ」とある。それを半世紀近くも私は「名はあざみ」と口ずさんでいたのである。

このような誤解や誤信、誤用や誤謬を他人の中に見出したときはどうするか？ 相手のプライドに関わるお節介には二の足を踏む。とはいえ、お互い「人･間」同士、ちょっと勇を鼓して「念のため」にパリサイ人に倣ってみてはどうだろう？ だれにも完全無欠な自己完結は望むべくもなく、一長一短の感性・判断力・記憶に頼って生きている。それでも何とか大崩れせずに人生が歩めるのは、あらゆる意味での相互扶助の精神と実践の賜物であろう。たとえわが目の梁は見えなくとも、隣人の目をかすませている塵には気がつく岡目八目を発揮したい。それが新たな人間関係の糸口になればもっけの幸い、善意のパリサイ人が良きサマリヤ人に変貌する。そのちょっとした勇気を出し惜しむかぎり、世間には冷たい風が吹きつづけ、良きサマリヤ人をあざ笑う、知らぬ顔の半兵衛が闊歩しつ

づける。「あなたがたは他の人にしてもらいたいことを、その人にしてあげなさい」という主イエスの勧めは、善意のパリサイ人が良きサマリヤ人へと成長するようがとなろう。

週に一度『新改訳聖書』に私は目を注ぐ。すると「それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。・・・それは、あなたがたが驚き怪しむためです」(ヨハネ 5:20) といった訳文に「驚き怪し」まざるをえない。この現実を見て見ぬふりをしておれないのも、私の中のパリサイ根性のそそのかすところであろうか？

(なるせ・たけし　名誉所員、本学名誉教授)